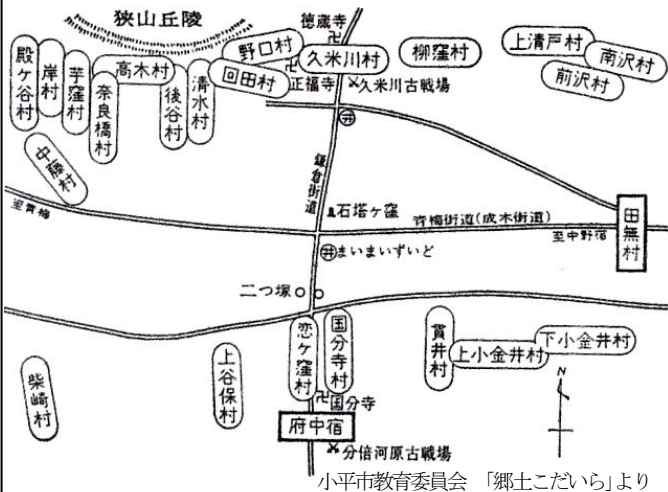


1. 玉川上水開削以前の小平

玉川上水が開かれる以前、小平周辺の武蔵野台地で僅かに集落が見られたのは狭山丘陵の麓や国分寺崖線付近だけで、現在の小平市の地は旧鎌倉街道は寂れ、東西方向の青梅街道(成木街道)が通っているのみ、集落が無い茫漠たる原野であった。

開拓以前の小平周辺の集落の分布



2. 小川村(小川古新田)の開発

小川家に小川村の開発の経緯を示す次のような内容の古文書が残されている。

「岸村(現在の武蔵村山市)の小川九郎兵衛が当時の様子を見て、通行する人馬を救い伝馬役を果たすため自分の入用金で新田を開発したいと代官に願い出た。松平伊豆守の支援もあり、明暦2年(玉川上水の開削から3年後、1656年)に、西は野火止用水から東は田無村までの新田開発が許可された。」

以下は小川家古文書(A-3 1)の原文の一部を示す。

「・・私祖父九郎兵衛同国村山郷岸村=罷有、此様子兼而及見、右之御伝馬継等御註進并往還之人馬為救、自分之入用金ヲ以御新田取立指上ケ申度旨、五拾三年以前申之年、今井八郎左衛門様御代官所之節奉願候へ、早速被為仰付、殊=松平伊豆守様ヨリ難有御意を以、西者江戸御水道と野火留水道との堀分ケより・・・」

江戸築城用等のため成木・小曾木で生産された大量の石灰が青梅街道を經由して運搬されていたが、田無と箱根ヶ崎間の約20kmは無人の荒野であり通行の難所であった。その間に中継宿(伝馬宿)が必要とされていたことから、小川村の開発の必要性があったといわれている。

3. 享保の新田開発

年貢収入が限界となり、江戸幕府は全国的に新田開発を奨励することにより年貢収入を増やすことを目論んだ。享保7年(1722年)に新田開発奨励の高札を江戸の日本橋に立てた。それに応募する形で小平地域でも小川村以外の新田開発がこの時期に行われた。大沼田分水、鈴木分水、野中分水などが開削され、小川新田、鈴木新田、野中新田、大沼田新田、廻り田新田が開発された。

小平市地域で最初に新田開発奨励に応募したのは小川家であった。従来の小川新田は小川村と改称され、この開発地が新たに小川新田とされた。2箇所に分かれており玉川上水の南側の細長い土地は秣場(まぐさば)であり、一橋学園駅周辺は畑地の開発であった。

次に応募したのは貫井村名主鈴木利左衛門で、投機グループと組んで、鈴木新田・野中新田の開発を行った。出資金により得た土地を倍額で売却することを企てる者(野中善左衛門)がいたり、新田の出百姓を壇徒として勢力の拡大を目論む宗派があったり、幕府に開発場役米代金を納められず土地を没収され投獄される者がいたり、様々な思惑に満ちた開発であった。

大沼田新田・廻り田新田は秣場を確保するために開発され、当初は農業を行って住み着く意思は少なかったといわれている。大沼田新田が専任の名主を持つようになったのは開発の20年後であった。

豆知識 「新田」といっても畑

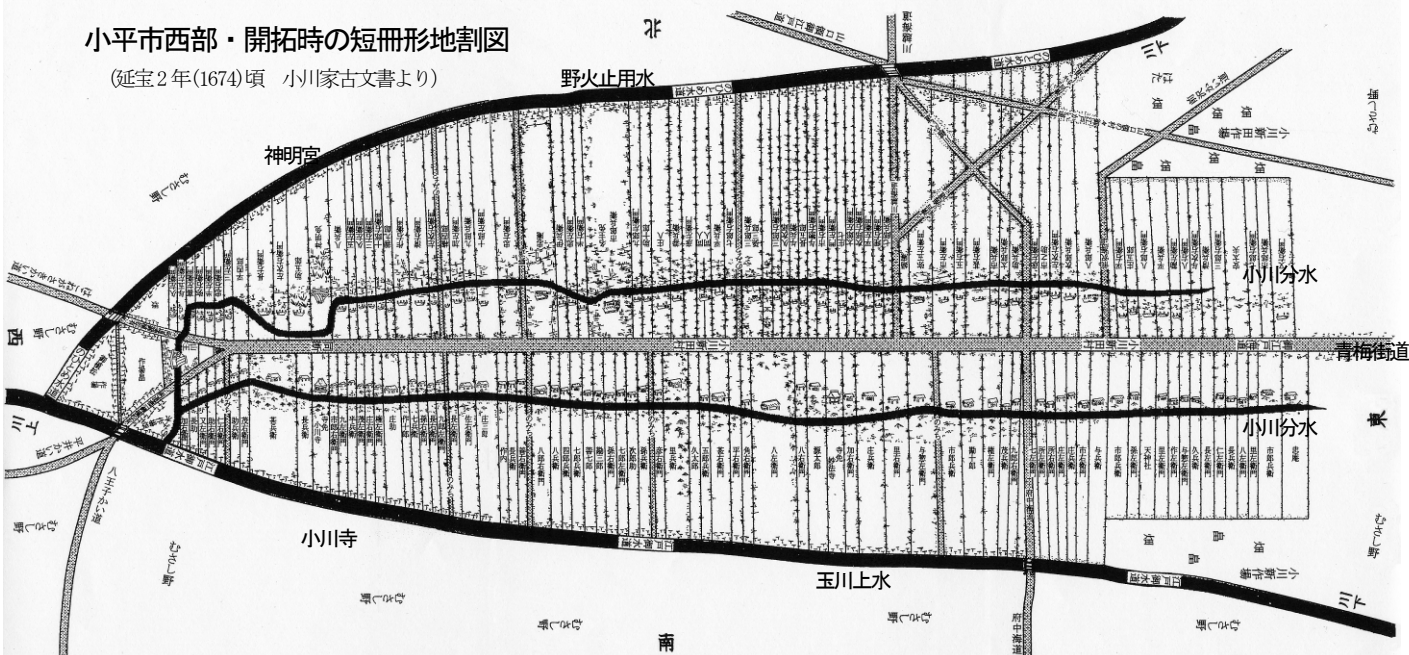
新田開発からは水田の開発を想起するが、小平市の地域は鈴木田んぼや大沼田田んぼを除き田に適した土地が殆ど無いため、大部分は畑地の開発であり分水の水は飲料水として使われた。

豆知識 短冊形地割(左の図)

江戸時代の小平の農地の地割は青梅街道を中心として南北に分かれた短冊形の細長い地割であった。今でもその面影が残っている所がある。呑水として利用された小川分水の水を各農家に最短の分水路の長さで効率よく分配するために短冊形の地割が採用された。

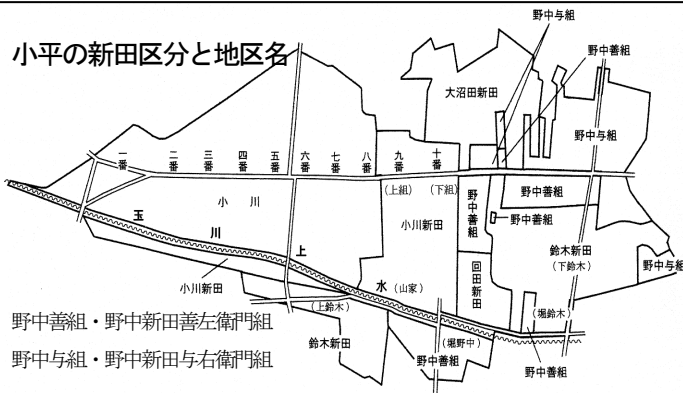
小平市西部・開拓時の短冊形地割図

(延宝2年(1674)頃 小川家古文書より)



4. 小平の新田

小平の新田区分と地区名



豆知識

開発当時新田の農作物 宝暦4年(1754)

大麦、小麦、粟、^{あわ}稗、^{ひえ}蕎麦、^{そば}菜、^{えごま}大根、^{ごま}荳、^{ごま}胡麻等

小川村明紳社による

出作百姓と出百姓

出作百姓 もともと居住していた家から開発地に通り耕作

出百姓 開発地に新たに家を建て移り住み耕作

6. 野中新田の開発

小平の新田の中で、「野中新田」は小川新田のような村請負型と異なり町人請負型の開発、極端に広い開発面積を得るなど他の新田と異なる特徴を持っている。

享保7年(1722)上谷保村(現国立市)の農民矢沢藤八、黄檗宗僧侶大堅らは農民6人と江戸の商人4人と共に、砂川村から田無村までの新田開発を計画した。冥加金250両を払えず、江戸町人(現千葉県君津市巖根町出身)の野中屋善左衛門に出金を頼み、享保9年5月に開発許可を受けた。

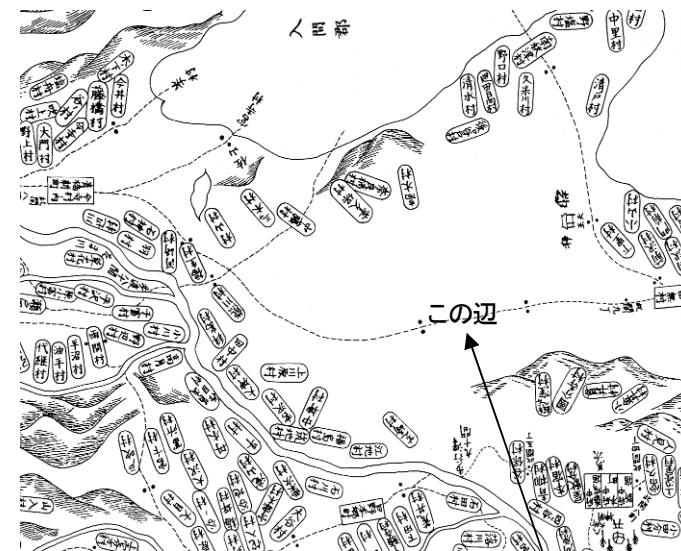
許可された面積は513町歩でこれを12人で分けたが、開発仲間の中には土地をすぐに砂川村や中藤村、大岱村、廻り田村などに売り渡し帰村するものもあり、享保11年までには約1/3の166町歩が他の村に売り渡された。(善左衛門は出資の条件として約131町歩を譲渡されたが時期は不明)

また、隣の鈴木新田(享保9年に299町歩の開発許可)が経営困難になり享保11年に野中新田に一時合併された。

享保17年10月、野中新田が広すぎるため三組(与右衛門組、善左衛門組、六左衛門組(現国分寺市))と、鈴木新田に組み分けられて、それぞれ独立した村落となった。

玉川上水ワンポイントガイド No.4

玉川上水と小平周辺の新田開発



玉川上水開削以前の小平周辺村落図 小川村は？ まだ生まれる前

正保年中(1645年頃) 新編武蔵風土記稿より

シリーズ 玉川上水ワンポイントガイド

No	テーマ
1	玉川上水の概要
2	玉川上水の分水
3	玉川上水の分水・小平編
4	玉川上水と小平周辺の新田開発
5	玉川上水の橋
6	玉川上水の水車
7	玉川上水の通船・船溜り
8	玉川上水の樹木・野草・野鳥
9	玉川上水と小金井サクラ
10	玉川上水あれこれ
11	玉川上水お勧め散歩ガイド

発行 No.4 2007年7月

発行 小平・玉川上水再々発見の会
E-mail tamagawasaisai@yahoo.co.jp
代表 庄司徳治

5. 小平周辺の新田と分水

